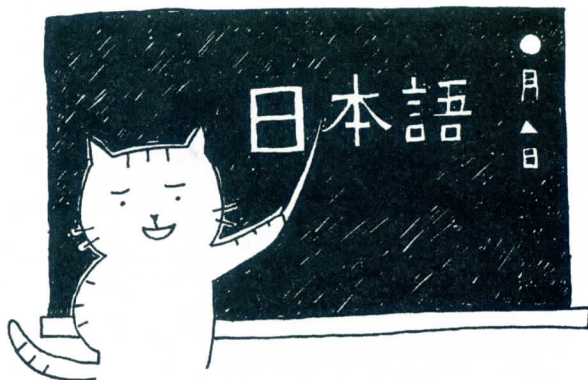


波多利朗の Funky Goods

Part.2

Psion シリーズ用日本語エディタ JEdit シリーズ

Series3、3a、3c上で動作するJEditを 導入する!



本誌 95 年 10 月号でもご紹介したが、Psion の EPOC OS 上で動作する日本語エディタとしては「JEdit」が広く知られている。この簡易日本語エディタは、Psion Series 3 専用のものと、Series 3a 専用のものが公開されているが、後者のソフトはそのまま Series 3c 上でも問題なく動作する。

本項では、Psion Series 3、3a、3c 上で動作する JEdit の導入方法について述べることにする。

Psion Series 3a、3c 用 JEdit を導入する

● Psion Series 3a と Series 3c

現在公開されている Psion 用簡易日本語エディタ、JEdit には、Series 3 専用のものと Series 3a 専用のものの 2 種類があるが、Series 3a 専用のものは Series 3c でも動作可能である。

Psion Series 3c は、Series 3a の後継機種であり、基本的な構成は Series 3a と同じだが、細かい点で異なる。

まず外装だが、Series 3c は 3a と異なり外装にラバー系の塗装が施されているので、手にとるとしっとりとした感触である(写真 1、2)。これは好みの分かれるところだが、筆者の個人的な意見では、Series 3a のほうが好感が持たれるように

思われる。またロゴも、Series 3a と Series 3c とでは異なっている。

仕様面での大きな違いは、CPU の動作クロック数だろう。Series 3a では V30H を 3.84MHz で駆動していたが、Series 3c では 7.68MHz と、約 2 倍のクロック数を実現している。そのため、体感スピードは Series 3c のほうが上だ。

また、Series 3c の米国仕様の製品には液晶にバックライトが付加されている。このバックライトは英国仕様の製品には装備されていない。液晶画面の解像度は、Series 3a、3c と同様である。

Series 3c には IrDA インターフェイス

が内蔵されているが、これも Series 3a にはなかった機能である。シリアルポートの形状も、Series 3a と 3c とでは異なっている(写真 3)。

表 1 に、Psion Series 3、3a、3c の仕様を示す。

● Series 3a、3c 用 JEdit の入手

それでは、Psion Series 3a、3c 用の JEdit を使用するために必要なソフトウェアを準備する。必要なソフトは、以下のとおりだ。なお、JEdit には 14 ドットフォント版(写真 4)と 24 ドットフォント版(写真 5)が用意されているので、好みに応じてど



写真 1 Psion Series 3c の外観

◎表1
Psion Series 3、
3a、3cの仕様

	Psion Series 3	Psion Series 3a	Psion Series 3c
CPU	V30H(3.84MHz)	V30H(3.84MHz)	V30H(7.68MHz)
搭載メモリ容量	1MB ROM、256KB RAM	1MB ROM、2MB RAM	2MB ROM、1MB/2MB RAM
ディスプレイ	240×80ドット	480×160ドット	480×160ドット (米国仕様はバックライト付き)
アクティブエリア	97×39mm	126×45mm	126×45mm
キーボード	Qwerty 58Key	Qwerty 58Key	Qwerty 58Key
I/O	シリアルポート×1 (Max 9600bps)	シリアルポート×1 (Max 19200bps)	RS232Cポート×1 IrDAポート×1
サウンド機能	ピエゾブザー	8ビット、11kHz PCM	8ビット、11kHz PCM
本体重量	275g(バッテリー込み)	275g(バッテリー込み)	275g(バッテリー込み)
メインバッテリー	単三乾電池2本	単三乾電池2本	単三乾電池2本
サブバッテリー	CR1620	CR1620	CR1620
メモリカード	SSD Drive×2	SSD Drive×2	SSD Drive×2
外形寸法	163×85×23mm	163×85×23mm	165×85×22mm
OS	EPOC	EPOC	EPOC

ちらか一方を導入すればよい。

- ・ JEdit14 ドット版プログラム本体(JEDIT.APP、PCONV14.EXE)

所在地：NIFTY SERVE→システム
ノートフォーラム(FSNOTE)→データ
ライブラリ2番 フリーソフト・デー
タ(一般)

282番 JED14V2G.LZH Psion3a用
JEdit(V2)14dot 版

- ・ JEdit24 ドット版プログラム本体

所在地：NIFTY SERVE→システム
ノートフォーラム(FSNOTE)→データ
ライブラリ2番 フリーソフト・デー
タ(一般)

283番 JED24V2G.LZH Psion3a用
JEdit(V2)24dot 版

- ・ 14 ドットフォントファイル(FONT.14)

所在地：NIFTY SERVE→ Hewlett-
Packard PC users' Forum(FHPPC)→
データライブラリ15番(旧 FYHP LX 関
連ソフト&データ*リードオンリー)
17番 FONT14.LZH JMEMO 用
14Dot Font

- ・ かな漢字変換用辞書ファイル(JISYO
.DIC、JISYO.IDX)

所在地：NIFTY SERVE→ Hewlett-
Packard PC users' Forum(FHPPC)→
データライブラリ15番(旧 FYHP LX 関
連ソフト&データ*リードオンリー)
18番 JISYO_L.LZH JMEMO 用辞
書(大)

- ・ フォントボールド化ツール(BOLD
14.EXE)

所在地：NIFTY SERVE→ Hewlett-

Packard PC users' Forum(FHPPC)→
データライブラリ15番(旧 FYHP LX 関
連ソフト&データ*リードオンリー)
331番 BOLD102.LZH FONT.14を
ボールド化

●フォントファイルのコンバート

JEditには、14ドットフォント版と24
ドットフォント版の2つが用意されてい
る。

24ドットフォント版はフォントサイズ
が若干大きすぎるため、実用には14ドッ
ト版が向いているだろう。そこで今回は、
14ドットフォント版JEditを導入する場
合について述べることにする。

まず、ダウンロードした14ドットフォ
ントをボールド化する。この処理は必須
というわけではないが、ボールド化した
ほうがフォントが読みやすくなる。

フォントのボールド化には、フォント
ボールド化ツール BOLD14.EXE を使用
する。この作業は、IBM PC/AT互換機上
にて行う。

次に、ボールド化したFONT.14をさら
にJEdit用のフォントに変換し、PJFONT
.14を作成する。この処理も、やはりIBM
PC/AT互換機上で行う。

フォントコンバータは、JED14V2.LZH
の中に格納されているフォントコンバ
ート用ソフト PCONV14.EXE を用いる。

IBM PC/AT互換機上で、フォントコン
バータPCONV14.EXEとFONT.14を同一
ディレクトリ内に置き、PCONV14.EXE
を実行する。これにより、JEdit専用の



写真2 Psion Series 3c のLCD パネルを開けたところ



フォントであるPJFONT.14が生成される。

●ファイルの転送

以上で用意したファイルを Psion Series 3a、もしくは3c本体に転送する。今回は、Psion Series 3a、3cにSSDを導入した環境で、JEditをインストールする。

Psion SeriesではMドライブが本体内部

蔵のRAMドライブとなっており、AおよびBドライブが拡張メモリカード用ドライブとしてアサインされている。今回は、以下のようなディレクトリ構成で、ソフトウェアをインストールする。

```
A:¥(外付けSSDドライブ)
├── APP ─── JEDIT.APP
```

```
FON ─── PJFONT.14
├── DIC ─── JISYO.DIC
└── JISYO.IDX
```

```
M:¥(本体内部蔵RAMドライブ)
├── TXT(文書ファイル格納デフォルトディレクトリ)
```



写真3 Psion Series 3cのRS232Cポートコネクタ

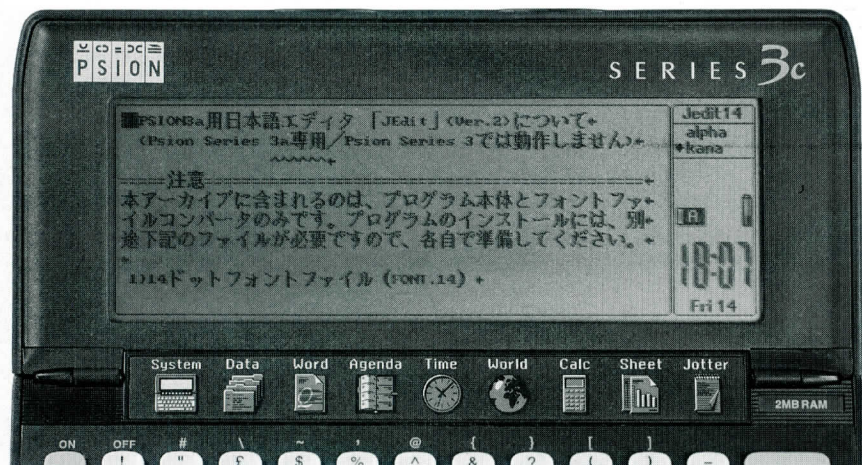


写真4 Psion Series 3c上で動作させたJEdit 14ドット版

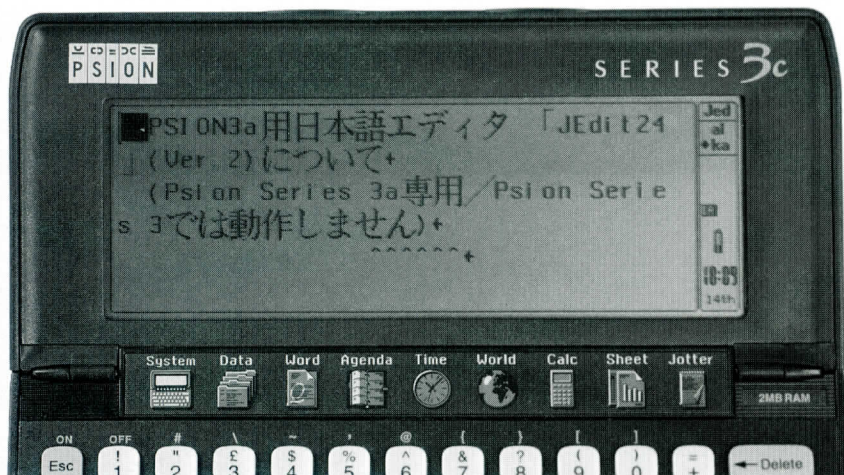


写真5 Psion Series 3c上で動作させたJEdit 24ドット版

フォントファイルPJFONT.14の格納先として、Psion内蔵のドライブ(Mドライブ)は使用しないようにする。これは、内蔵ドライブはアクセススピードが遅いので、文字表示速度が大幅に低下してしまうためである。

また、文書ファイル格納用ディレクトリ(¥TXT)は、できるだけ内蔵ドライブ(Mドライブ)、またはRAM SSDドライブ上に作成する。文書ファイルは頻繁に更新されるため、Write OnceタイプのFLASH SSDに格納すると、ファイルを更新するたびにディスクスペースを消費してしまうので、注意が必要である。

●アプリケーションの登録

標準のインストール方法(PSION+I)でJEditをシステムスクリーンに登録する。以上でPsion Series 3a、3c上で日本語エディタを使用することができる。

なお、制限事項については、Psion Series 3a用JEditのドキュメントファイルを参照していただきたい。

▶ Psion Series 3用JEditを導入する

●Psion Series 3用JEditの入手

Psion Series 3はかなり前の製品であり、ユーザーも少ないと思われるが、Series 3専用のJEditの導入方法についてもいちおう記載しておくことにする。

必要なソフトウェアは、以下のとおりである。

・Psion Series 3専用日本語エディタ(J3EDIT.APP)

所在地：NIFTY SERVE → システムノートフォーラム(FSNOTE) → データライブラリ2番 フリーソフト・データ(一般)

246番 J3ED1A1B.LZH Psion Series



3用日本語エディタ

- ・恵梨沙フォント Psion 版 (ELISAM10.FNT)

所在地：NIFTY SERVE → システムノートフォーラム (FSNOTE) → データライブラリ 2 番 フリーソフト・データ (一般)

245 番 ELISAM10.LZH Psion Series 3 用 8 ドット恵梨沙フォント

- ・かな漢字変換用辞書ファイル (JISYO.DIC, JISYO.IDX)

所在地：NIFTY SERVE → Hewlett-Packard PC users' Forum (FHPPC) → データライブラリ 15 番 (旧 FYHP LX 関連ソフト & データ * リードオンリー)

18 番 JISYO.LLZH JMEMO 用辞書 (大)

● ファイルの転送

準備したファイルを Psion Series 3 本体に転送する。今回は、Psion Series 3 に SSD を導入した環境で、JEdit をインストールする。Psion Series では M ドライブが本体内部の RAM ドライブとなっており、A および B ドライブが拡張メモリーカード用ドライブとしてアサインされている。

今回は、以下のようなディレクトリ構成でソフトウェアをインストールする。

```

A:¥(SSD ドライブ)
├── APP ─── J3EDIT.APP
└── FON ─── ELISAM10.FNT
  
```

```

└── DIC ─── JISYO.DIC
└── JISYO.IDX

M:¥(本体内蔵ドライブ)
└── TXT(文書ファイル格納デフォルトディレクトリ)
  
```

フォントファイル ELISAM10.FNT の格納先として、Psion 内蔵のドライブ (M ドライブ) は使用しないようにする。これは、内蔵ドライブはアクセス速度が遅いので、文字表示速度が大幅に低下してしまうためである。

また、文書ファイル格納用ディレクトリ (¥TXT) は、できるだけ内蔵ドライブ (M

◎ 波多利朗の予告！

PC CHIPS 社のプロダクト

筆者は、本誌 95 年 7 月号の本項において、「PC CHIPS 社のマザーボードで遊ぶ」と題して、同社の製品を紹介した。あれから 2 年と 5 ヶ月が経過し、マザーボードの世界も大きく変化した。そこで近々、「PC CHIPS 社のプロダクト」と題する特集記事を掲載することになった。これはその予告編である。

ところで、最近の Pentium 用マザーボードの売れ筋といえば、やはり Intel の 430TX を使用した製品だろう。有名どころでは、ASUSTeK Computer Inc. の TX97 や GIGABYTE の GA-586TX3 など挙げられる。市場にはさまざまな種類のマザーボードが出ているが、ボードで使用されるチップセットが同じものであれば、その仕様も自ずと似たり寄ったりのものになってくる。実用には十分だが、遊んでみたいと思う向きにとってはあまり面白くないだろう。

ご紹介する予定の PC CHIPS 社のマザーボードは、非 Intel 系のチップセットを用いたユニークなものであり、いろいろと遊ぶ余

地が残されている製品である。

まず、「TOP GUN」と銘々されている M565 マザーボード (写真 1) は、チップセットに TX PRO PENTIUM PCI チップセット (写真 2) を使用している。それにしても「TOP GUN」とは、またとんでもない名前を付けたものだ。

このチップセットは 2 個の BGA チップから成り、ALI のアラジンチップセットをベースとしている。マザーボードは Pentium 90 ~ 300MHz をサポートし、外部クロックスピードも 60 ~ 83.3MHz の間で選択可能である。

また、オンボードで 1MB のレベル 2 キャッシュ (PB-SRAM) を実装している。メモリスロットは、72 ピン SIMM スロット × 4 本 + 168 ピン DIMM スロット × 3 本という豪華な構成で、合計 384MB までのメモリを実装できる。電源コネクタも ATX 仕様のもので従来の AT 仕様の両方に対応しており、まさに至れり尽くせりのボードである。

次に挙げる M567 マザーボード (写真 3) は、徹底したコスト削減が行われている。チップセットには TX PRO-Ⅱ を採用している。チップは SiS 5598 ベースで、BGA チップ 1 個で

構成されている。

TX PRO-Ⅱ チップにはヒートシンクが装着されており、その上面にはどこかで見たようなロゴで「video inside」という文字が印刷されている (写真 4)。

このチップには 64 ビットの VGA チップが内蔵されており、ビデオメモリはメインメモリをシェアする構成となっている。解像度は最高で 1280 × 1024 までサポートしている。

将来的にはこのボードに音源も実装されるということなので、極端な話、ISA と PCI スロットにカードを 1 枚も挿入せずにパソコンを構成することが可能となる。

このボードも ATX 電源および AT 電源の両方に対応している。ボード上に VGA 機能を内蔵させることについては賛否両論があると思うが、低価格のネットワーク端末を構成するのには有利といえよう。

というわけで、近日中に久しぶりに PC CHIPS 社のプロダクトをご紹介できる機会を得た。前述のマザーボードのほかにも、まだまだ新製品のマザーボードや怪しいチップを使用したビデオカードなどが豊富に用意されている。お楽しみに！

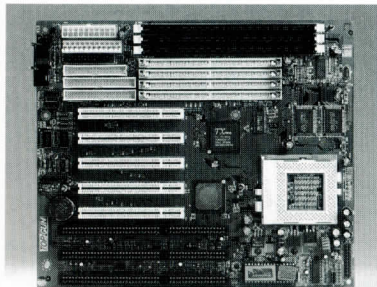


写真 1

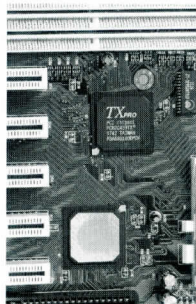


写真 2

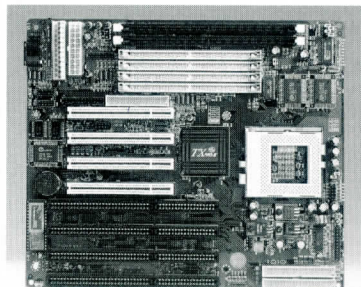


写真 3

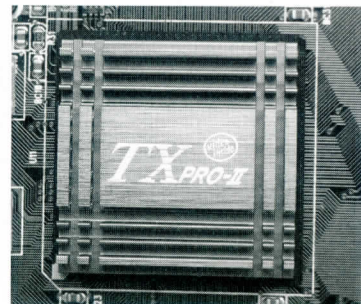


写真 4



ドライブ)、またはRAM SSDドライブ上に作成する。文書ファイルは頻繁に更新されるため、Write OnceタイプのFLASH SSDに格納すると、ファイルを更新するたびにディスクスペースを消費

してしまうので、注意が必要である。

●アプリケーションの登録

標準のインストール方法(PSION+D)で、JEditをシステムスクリーンに登録する。

以上で、Psion Series 3上で日本語エディタを使用することができるようになる。

なお、制限事項については、Psion Series 3用JEditのドキュメントファイルを参照していただきたい。

香港のソフトハウスが Psionを日本語化する!?

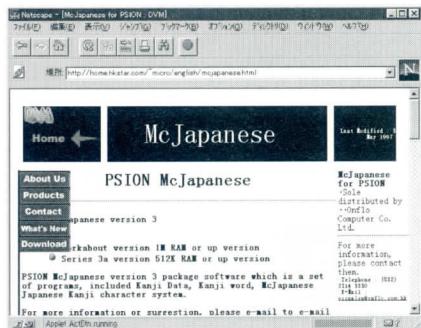
Psionの日本語化ソフトと言えば、Psion本体が日本語をサポートしていない現在、波多利朗氏が紹介された日本製のものしか存在しないと思っていた。

ところが、ひょんなことから香港でPsionを日本語化するソフトウェアをつくっているところがあるという情報を得た。早速、そのWebページ(URLはhttp://home.hkstar.com/~micro/home.html)を見ていったところ、面白い情報が得られたので紹介しよう(画面1)。

●香港のPsion中国化ソフト会社

まず、その肝心の香港のソフトウェア会社だが、社名をDVM Consultants Ltd.という。もともとはPsionを中国語化するソフトウェア「McChinese」をつくっていたのだが、同じ2バイトコードということから、日本語化ソフトウェア「McJapanese」も開発するようになったそうだ。

このほかの日本語関連ソフトウェアとして、What's Newで紹介されている日本語用SDKにも興味を惹かれたが、まだ開発途上で発売時期/価格とも未定とのことだった。



画面1 DVM Consultants社のMcJapanese紹介ページ

●3a、3cに対応する「McJapanese」

現在のバージョンのMcJapaneseは、EPOC/16用——すなわちWorkaboutを含めたSeries 3a、3c用のソフトウェアである。

この製品は、バックグラウンドで漢字サーバとして機能する「McJapanese Japanese Kanji character system」、内蔵アプリケーションDataとよく似た日本語対応データベースアプリケーション「Kanji Data」(画面2)、同じくワープロ「Kanji Word」(画面3)の3つのプログラムより構成されている。

日本語変換の方法は普段われわれが使っているFEPと同様に「ローマ字かな漢字変換」である。変換は単漢字、単語単位で可能とのことだが、変換効率や細かな使い勝手が気になるところだ。

この漢字システムは日本語コードにShift-JISコードを採用しており、他のPCとの連携を考えると、この点はありがたい。

現在、このSeries 3a、3c用のMcJapanese(以下、McJapanese16)は新バージョンの開発中ということで、早ければ97年11月末にもリリースされる予定である。新バージョンでは、速度の改善とWordの画面変更、Dataをスケジュール的に使えるなどの変更が加えられるという。

●Series 5対応のMcJapanese32

さて、本誌読者の最大の関心事は、このMcJapaneseがSeries 5に対応するかどうかということだ。答えは「イエス」である。

このSeries 5対応のMcJapanese(以下、McJapanese32)は、中国語版McChinese32



画面2 McJapanese Kanji Dataの実行画面

に引き続いて開発が行われている。McChinese32は97年11月中旬にリリースされ、その後にMcJapanese32のリリースが予定されている。現在のスケジュールでは、「来年早々」の予定とのことだ。

●Eメールによる注文で購入できる

現在、このソフトウェアは、Onflo Computer社からの直販のみで購入可能である。日本からはEメールによる直接注文を受け付けている。ただし、支払方法が高額な手数料がかかるTT(電信送金)のみで、クレジットカードが利用できないのが残念だ。

McJapanese16は、FLASH SSDにインストールされたかたちでのみ供給され、単体の販売はない。McJapanese32は、Eメールによる送付かコンパクトフラッシュにインストールしたかたちでの販売となる。

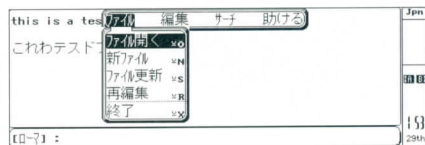
今回情報を提供してくれた販売元のOnflo Computer社の対応は、丁寧かつ迅速で、好感が持てた。最近では日本からの問い合わせがかなり多いらしく、日本人旅行客が直接見学に来ることもあるとのこと。McJapanese32の販売が開始されるのが楽しみである。もちろん、入手し次第、レポートしたい。(丹羽 誠)

◎McJapanese16

価格: US\$199(1MB Flash SSD)
US\$279(2MB Flash SSD)

◎McJapanese32

価格: US\$100(Eメールデリバリー)
US\$260(コンパクトフラッシュ)
(いずれも、日本への送料/手数料込み)
問い合わせ先: Onflo Computer Co. Ltd.
E-mail: occsales@onflo.com.hk



画面3 McJapanese Kanji Wordの実行画面